

# 小麦の超多収施肥体系技術の現地実証と普及 ～小麦の収量向上を目指して～

## 農業革新支援センター

### 【普及活動のねらい・対象】

小麦の収量向上による大規模土地利用型経営体の所得向上を目指し、有効茎歩合や登熟歩合の改善が可能な後期追肥重点型「超多収施肥体系技術」の現地実証ほの設置と現地への導入を図りました。活動2年目となる平成30年度は、実証ほの拡大と実証結果を基にした、県内小麦生産者への普及活動を展開しました。

### 【普及活動の内容】

気象条件や栽培品種の異なる2地域（大津・南部「農林61号」、湖東「ふくさやか」）の実証ほで、平成29年度から継続して実証ほを設置し、データ収集を行いました。調査結果は、速やかに実証農家へフィードバックし、施肥体系の違いによる生育・収量の差について共有しました。



写真 県域栽培研修会での紹介

また、技術の普及を図るため、県内の小麦生産者を始めJA営農指導員や普及指導員等を対象にした、実証ほを活用した現地検討会を3回開催し、県域の栽培研修会（生産者177人、関係機関・団体72人）を開催し、技術の特徴と現地実証の成果を紹介しました。

### 【普及活動の成果】

2地域とも「超多収施肥体系技術」により穂数の増加や穂長の伸長が見られ、収量が向上することを実証できました（対慣行比：守山市179%、彦根市154%）。平成29年度には実証ほのみであった本技術は、平成30年度には4地域、7.2haに普及しています。今後、県内各地で超多収施肥体系技術の実証を増やし、収量向上対策技術として普及を目指します。

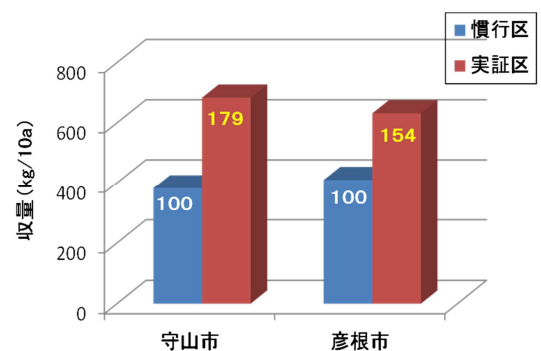


図 各実証地域における収量（H30年産）

### ◎対象者の意見

現地実証により収量が向上することを実感しました。緩効性肥料を使用した2回分施肥体系と比べて、収量が高く、肥料コストが低減できれば、小麦生産者にとってより魅力的な技術になると思います（実証農家S氏）。